

くから、景行天皇以来田道將軍の派遣、そして斉明朝の阿部比羅夫の出羽以北の蝦夷討であったが、背後に強大な勢力をもつ安東・安倍一族を平定することはできなかった。

一時屈しても、また反抗ということで、交通全く不便、予想外の反激、中央擄取の年貢反対など、王化がなかに及び難い時代が繰り返された。続いて奈良時代、光仁帝の蝦夷征討も失敗され、何等の効果も得ないうちに崩御となった。

蓋し蝦夷（安東代政権）の討伐は、奥羽・北海における開拓・植民事業を伴っている。

大和朝廷では、関西に南の人口が増せば増すほど、人口の捌け口を他に求める必要にせまられ、奈良朝より平安にかけた中央朝廷の仏殿に消費した財政の困難と併行して続く冷害時代に入って、どうしても奥州の政服、年貢の強制徴収は絶対的条件であった。だが、どんな犠牲を払っても、その反服がしばしば繰返され、時には突然に背反し、按察使紀広純を殺して多賀城を征夷大使に任じ、安倍家麻呂を鎮狄將軍としたが、宝龜十一年三月、だが、連続の逆襲で秋田城を捨てた。光仁帝より恒武帝に移り、前代が残したこの難事業たる蝦夷討征に敢然とし当った。大和民族の膨張とその植民地との必要性をここに重大視して、①巨額の軍費を要す ②多数の強兵と屈強の將師 ③厳寒や嶮岨の地に忍耐する力、④公正な地方官の努力 ⑤將士が交通・食糧補給に堪え得る事、などの準備が徹底しなければ成功はしない。この判断に立って恒武帝は坂上田村麻呂征夷大將軍に任命され、將士十万人、糧十二万余斛を備えて本拠に向うことになった。

用兵に巧みで、勇猛の意味で全軍を鼓舞して進撃したのは同十二年二

次第に戦果も上り、東北経営も除々に整って、延暦二十二年には志波城を築き、秋田城を廃して出羽国鳥海に柵を設けて、やがて東北の重鎮は、膽澤志波・雄勝城と併せて三箇所より異民族（安倍一族）の反乱を平定し、皇威の波及するようになった。恒武帝の最大の事業が一応完成したのである。

これは、帝の英武にもよるが、田村麻呂の功績が絶対であり、彼は遂に中納言となり、近衛大將も兼ね、正三位大納言に榮進したのである。

ネプタ視考については、一にだまし打ちであり、半開地の当時の東北民にとっては驚異の戦術だった事には間違いない処である。

然しこの戦術もやがて見破られて逆に利用される所となり、やがて懐柔策に疑問がなげかけられるものとなった。なぜか、中央政府の年貢取りが次第に強められ擄取政治が始まり、地方官の悪徳が隠微な調和を破って行ったからである。『戦前の日本の大陸政策』と同じく、文化的に同化せしめる声に一時的に融和が計られても、粗野な半開的な民族にとって、それは生活の面で解放された経済効果のない政略にはなじめないからである。

ネプタは東北地方に大きな経済効果を挙げることはできなかったが、それは戦術と戦略によって征服し、東北統一の偉大な武器となって、時の朝廷を東北支配の最短射程の要件を満していた事は実証されよう。

然しながらそれを見破られた後の反動は、更に一層の戦術効果が逆転して奥州平定の夢は間もなく崩壊されるものとなり、再び蝦夷は、安東・安倍一族の支配下になり、やがて平泉藤原の手によって奥州は統一されることとなった。

月であった。相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後の民九千人を伊治城に移住させたと記録されている。全十四年正月に一段が付いて田村麻呂將軍は京に凱戦した。だが、一時収まりかけた奥州の地はその実、一時の油断も許されず、賊地に往還して策応する者が数多く反抗の勢いを張っていた。蓋し当時の陸奥の最北端では、ひとり蝦夷民族のみならず、その背後に土豪が潜んでいて、せん動し、操ったりして一層事態を錯雑せしめ、紛糾せしめた。このために朝廷においても更に、根本的にその巢屈す目的で、再び十九年十一月、田村麻呂を征夷大將軍として同二十年二月、四万の將士を従えて陸奥に派遣したのである。

奥羽の地に政府軍の足跡を止め征夷することは、今日私たちが安東・安倍一族の史実を究明するものにとっては極めて困難というより樞風沐雨の辛酸に堪え、あまねく浚険な山肌を越えて跋渉する敵の手強さ、更に今日の常識で東北・北海道にわたる日本全土の五十三%の賊地の平定なども、夢であった。

そこで、今日考えられる処では、田村麻呂にして、この異民族を如何にして鎮圧するかは、武力だけでは不可能であり、安倍比羅夫と同様に柔策と和睦の道よりなく、更に夷をもって夷を征する方策よりない事である。

このために用いられたのが、ネプタ的な驚異的な時の勝潤戦術であった。巨大な人形と偽装芝居的なネプタ戦術は、田村麻呂の頭脳に深く刻み込まれているのは、京の祭り芝居に認識のあった者の術策であり、軍用資金の高変な使い方であり、人海戦術よりはるかに安易な費用の節限であった。当時たしかに文化面では低かった陸奥の人々に対しては何より効果の大きかった戦術であったと思われる。

今も一、〇〇〇年の歳月後、なお青森県民に例年の行事として愛され、親しまれている所以は、やはり東北三大祭りの最たるものとしては当然であろう。そのネプタの意義については今や視考や、価値観を越えて、地方唯一のものとなり、県下最大の行事におこまれる結果となったのは、時の変遷に伴う。（北郡中里町今泉在住土地家屋調査士）

農民

伝承のもの

秋元惣之進



今から一二七五年前の和銅三年（西暦七一〇年）、奈良時代の頃から蠟燭が中国から渡ってきたという。当時は高価なもので、宮殿や、大寺院以外は使われなかったと云われる。

五九三年前の明徳三年（西暦一三九二年）室町時代の頃の庶民は、玉蜀黍の芯で、松脂を笹の葉で包んで灯したと云うが、四一二年前の天正元年（西暦一五七三年）、桃山時代に、櫛の実で作った蠟燭が一般に用いられた。

堤灯の類が生れたのは桃山時代で、江戸時代（西暦一六五二年）には高張堤灯ができてくる。

津軽の農民は、堤灯からヒントを得て、四角な箱灯籠（ネプタ）に棒を付け、担ぎ燈籠を、七月七日の七夕行事にくり出したのだろう。

津軽では、眠むいのを『ネプタエ』（方言）と言うが、『ネプタエ』

のを我慢して、七夕様に燈籠を奉納、『ネプタエ』のが、なまって『ネプタ』となったのではないか？

昔、七夕行事に、どこの農村の、小さな部落でも、担ぎネプタや、小形扇ネプタが農民の手によって作られ、邑の中を練り歩き、農民の素朴な喜びを表現したものであった。

ネプタの起因について、諸説の相違があり、疑念がいだかれるが、ネプタの本来の姿は、承応年代後の高張提灯から発達し、農民が創意工夫をこらし、担ぎ灯籠や、手持ち扇ネプタを作り、七夕行事に五穀成就・悪疫退散を祈った、農村古来の農民信仰から起因して、現在の『津軽ネプタ』に伝承されたものと、私は解する。

土俗信仰から



きのした清一

古代人・津軽の土着民、私達の遠い彼方の祖先は、燃える火を神聖視、神々に火を献じて、病魔退散、悪疫・悪虫退散、部族の繁栄を祈ったであろう。今でも、神前に献火・献燈としてローソクを献灯を献ずる習わしがある。津軽のネプタも、火神崇拜の土俗信仰が形式化し、発祥したものとは私は考える。

火の神聖視、それは、私達が少年期の、第二次世界大戦（大東亜戦）が終るまで、津軽地方の農民は、食生活の根本である炉の火を絶やすこと

をしなかった。

寝るときは薪の炭火に灰をかけ、朝の朝餉に灰の中から火種をおこし、火としたもので、炉の中に痰をはいたり、汚したり、四ツ足（馬犬等）の肉鍋をかけることは、火の神が怒るとして禁じられ、神聖視したもので違つて肉鍋をかけると、炉に塩をまいて清めたものだった。

日本の祭りに、福岡鬼夜の火祭り、京都の大文字・鞍馬の火祭り、和歌山那智の大松明火祭り、滋賀近江八幡の左義長（どんどん焼き、北海道オロチヨンの火祭り）と、熊本山鹿の灯籠祭り、愛知一色の大提灯祭り秋田竿灯、能代燈籠のように、行事が多いことを知ることができ、いずれも火を対象としている祭りで、土俗信仰・神仏信仰から、その土地々々独特に発展したもので、津軽の『ネプタ』も………。

遠く古来にさかのぼって、坂上田村磨呂が蝦夷侵攻に燈籠を用いた通説が、やぶにらみ意外史として裏返せば、田村磨呂が東日流に足を踏んでいない史実からして、部下が侵攻してきたとき、東日流人は、悪魔が南から侵攻してきたとして、火せめの計でもって東日流から悪魔・悪虫（政討軍）を退散させた裏返し東日流史が、『語り部』によって伝承されたことが、土俗信仰と仏教伝来による信仰と、土着農民の農作業行事の風習が、七夕行事と合体して、『津軽ネプタ』が発祥したと推理する。なお、津軽藩祖為信が都大路に大提灯籠をくり出した俗説は、裏返せば、当時すでに、津軽の在野には、すでに『ネプタ』の原形ができあがっていて、行事化されていたことになる。立証されますので、私は、津軽の『ネプタ』の起因は、為信が津軽を統一した以前から、田村磨呂が東日流浸攻に用いたものでもなく、古来からの東日流伝承行事と仏教祭事が合体し、伝統的な津軽独特の『ネプタ』が、津軽在野の住民の手

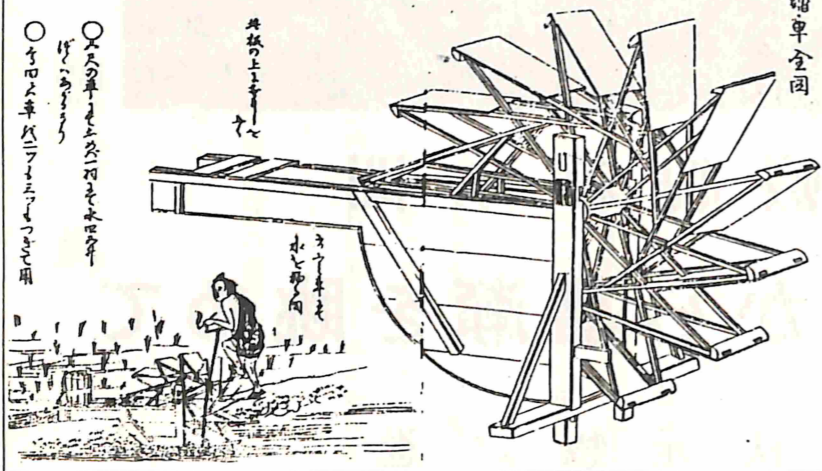
によって育てあげられたものであると決論づけます。

昔の農具 ② 踏車（揚水機）

諸国一般に昔から、用水路の水を水面より高い田畑（水をあげるには龍骨車を使った。（龍骨車とは箱形の桶のなかを、エンドレスのくさりにつながれた多数の方形の板が水を押し上げるもの。くさりとは人がペダルを踏んで駆動される）

しかし、寛文年間（一六六一〜七二）に大阪農人橋に住む京屋七衛、清兵衛という人がこの「踏車」の揚水器をつくった。そして宝暦・安永（一七五一〜一七八〇）の頃までに各地に普及した。

昭和二十年頃まで、使用された。
― 農書全集より ―



嘉瀬話 ② 阿部按摩師笑談

観音様

金九郎は、『花田屋』の借子である。

昭和二十五・六年頃まで、田の草取りは機械や除草剤など、まったく使われなかった。泥の中にヒザまでつかり、まるで蒸し風呂のなかでの田の草取りであったころのこと。

田の草取りは一番草、二番草、三番草取りと続き、腰が曲り、爪がすり減ったものであった。

金九郎は、何時も主人に『なんぼ、草取るネ 遅せばナ』と叱られようであったが、金九郎の作業は一向にスピードが上がる様子もなく、主人の娘『サヨ』の『ケツ』の後を這うように追っている。

『サヨ』のドンジャの下にはいている『モモヒキ』のサケ目から、『サヨ』の観音様がチラホラ、胸躍らせ、血を湧かせて金九郎、主人の叱言など耳に入らない。

あるおぼろ月の、ヤケに蛙がワメキ鳴く夜、金九郎は、そつと夜這いに入り。

『サヨ、オラァ、毎日お前様の観音様拜んでら、何んがしてけへ』

サヨは さつと顔をあからめ

『へば、ご利益あげる』といって、二人は結ばれ、金九郎は借子から身上がりすることができた。

（集録 治利）



藪 睨み 余 聞

観音山から嘉瀬を眺めて

— 秋 元 惣 之 進 —

嘉瀬の東方背後小高い丘、津軽半島の背稜中山山脈の裾野にひく立山一帯を、通称観音山と言う。

この立山の観音堂から西北地方の田園地を眺めると、屏風山の砂丘地や、七里長浜が見え、晴れた日には権現崎も眺望でき、南西を見るととき岩木山が津軽平野に腰をすえている。

東は中山山脈の峰々が連らなり、大倉岳が目の前で、松林が展望される位置に観音山がある。

越し方の嘉瀬を探る、藪睨みながら、古老の話に耳をかたむけ、部落内を歩き回り、余聞した話しを、私なりにまとめ発表する次第で、拙文は平に御容捨。

薬 師 神 社

薬師神社は神仏混合の名残りで、薬師瑠璃光如来であり、嘉瀬には薬師神社が二社ある。一社は鍛冶町南端の県道沿い西側田圃の真ん中一反部位の島状にポツンとした一盛りの林の中に位置する。

もう一社は立山通称観音山に祀ってあるが、この薬師神社は、今から約八年前（明治四十年ごろ）西暦一九〇七年）までは、現在の東町リソグ園跡は『ダク競馬場』敷地であった。薬師神社はこの競馬場の守り本尊としてあったが、競馬場が廃止された明治の末期、村の共有地であったこの敷地が約拾七町歩が個人の所有地にされた。薬師神社の講中人が思案の末に、己むを得ず観音山に神社を移転した。

元和元年二代藩主信政時代（西暦一六一五年）津軽領域は大凶作とな

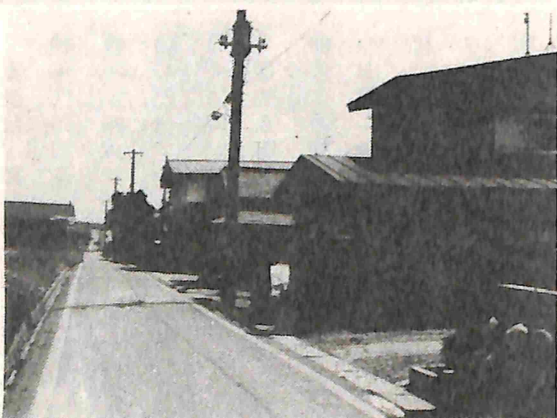
嘉瀬駅から観音山嘉瀬スキー場に行く途中の嘉瀬小学校南側はリング園の中に住宅が建っている。ここが『ダク競馬』が開催されたことのある東町である。

先代の嘉瀬の人達が、嘉瀬の村端れ立山の下共有地の平坦地に明治二十二年『ダク競馬場』の工事に取りかかった。

当時の競馬は茫茫とした野原山で、村人達は、草木を刈り払い丹念に手入れを加え整地し、競馬場が明治二十三年（西暦一八九〇年）に完成旧暦四月八日の薬師神社の大祭には『ダク競争』が華やかに催され、近郷近在から大勢の見物客が押寄せ、数拾軒の露店が軒を並べる賑ぎわいをみせ、北津軽郡内の一つの名物となっていたという。

この『ダク競争』の騎手は色彩も鮮やかな乗馬姿で、背中には、色取りどりの旗を立て、馬も美しく飾り、競技は早く走るだけでなく、騎手の姿勢や、馬の足の運び方が重点に採点するという津軽地方では珍らしい馬合せの競技であった。在々の各村から選ばれた騎手達にオラ

かつての競馬跡東町



ダ ク 競 馬

立山薬師神社
運は『霊夢』を得て、観音山ふもとから『霊水』が渾々と湧く泉を発見
村人達に『霊水』と『マタタビ（薬草）』を飲ませ疾病を治してやったと語り伝えられ、宗運はこの清水の上の原、ダク競馬場跡に小さな薬師堂を建立したのが薬師神社の起因であるとされ、薬師瑠璃光如来仏は衆生の疾病を救え、解脱に導く仏で、毎年旧四月八日が観音山薬師神社の例祭となっている。

嘉瀬鍛冶町南端の薬師仏の祠があるのは、当時の農民の病氣と仏に祈る信仰か何かによるものかは詳らかでない。



立山薬師神社

り領民は飢饉に苦しみ、疾病がまえんしていった。凶作は農民にとって生活の断絶を意味し、余力のない小作人の百姓は、凶作に依って真先にその犠牲となっていた。

元和二年幕府から拝領米一萬石が届いて、津軽領民はようやく露命を繋いでいた時、津軽を行脚中の僧宗運（藤崎出身という）が嘉瀬に立寄り、疾病で苦悶している嘉瀬の人々を見て、『良薬は無いか』と山野を探し求め、或る夜宗

採点するという津軽地方では珍らしい馬合せの競技であった。在々の各村から選ばれた騎手達にオラが村の代表として見物人は、笛大鼓や鐘を叩いて応援、競技は一層賑わいを見せたといわれ、騎手は今の花形スターであって、若い娘達のあこがれの的であったと、今でも私達の部落の老婆が昔語りに語ってくれる。

この賑わった『ダク競争』も金

木の芦野に競争馬の馬場の出現によって次第にさびれ、明治四十年には全ったく絶えてしまった。

廃れて行った『ダク競馬』の事績をと、時の実力者古川勇之助氏がダク講中とはかり、嘉瀬にこれに変わる名所を作る音頭を取り、現在の立山（観音山）に『除災招福』の『観世音菩薩如来』の観音堂を建て、昭和八年三十三体の観音菩薩石像を参道に配し、各自の家庭の護り本尊とした。

その後嘉瀬部落共有地であった『ダク競馬』跡地は、時の権力者のものとなり、年を経てこの地はさらに、柏村の大地主に買取られていったが、第二次世界大戦で日本が敗戦となり、戦後の食料増産、農地の拡大政策と農地改法に伴って、柏村の不在地主の手からはなれ、戦後引上げてきた人、小作人の手に土地が配分され、現在の東町が成立した。

古式にのっとった嘉瀬の『ダク競技』、嘉瀬の奴踊りとともに再現、後世に残さなければならぬ。嘉瀬の芸能伝統ではないだろうか。

また嘉瀬に『ダク競馬』があったということは、古来から嘉瀬は馬の産地を形成していたことと、立山に連なる九流れ一帯が馬草刈り場であったことに立証できる。

山神と田神

観音山の葉師流れ急勾の参道を行く途中北側に、松林が林立する中に朱鳥居三基、その奥に山ノ神祠がある。

が一般的に広がっていた。

また、田ノ神様（宇賀能美多麻）は、稲の神として祀った神であり、当時の農村社会では、田ノ神を祀る風習と信仰は、かたりへの言い伝えでは『稲霊』であり、それに伴って、水に対する信仰が最とも強く、田ノ神と『水神様』を併用して祀るようになった。水神の神体を俗信として『竜』や『大蛇』『河童』は水を呼ぶものとし、水流の源『清水コ』に津軽では祠を建てている。

狐を田の神の使者とする俗信も広く津軽に広まり、仏教では『茶枳尼天』が狐に乗っている絵馬や、主神像とする民間信仰も広く伝わっている。

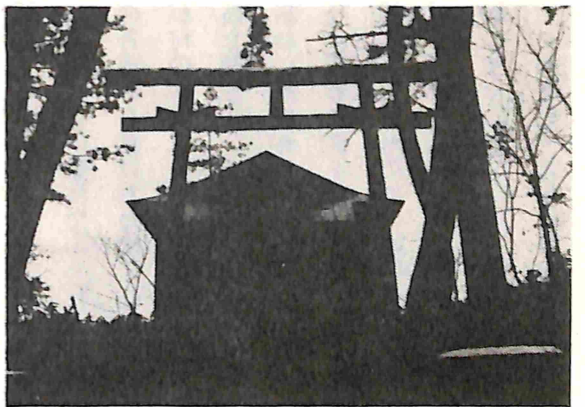
水の豊富に流れるを祈り、稲の豊作を自然に祈るしかなかった昔の生活は、自然は驚異であり、天然自然を神のなせる業として信仰と結び付け、山ノ神は普段は大変に温和しく萬物を護って呉れるが、且つ怒り出すと手も足も付けられない程凶暴で、暴れ捲る恐れられた神様でもあった。

嘉瀬でも、山の仕事をしている人農業に従事している人が、旧歴の十二月十二日に観音山の山ノ神に、餅と酒魚を供え、朝から仕事を休み祝います。一年間の作業を安全祈願して。

嘉瀬の桃

立山嘉瀬スキー場のある通称観音山の観音堂内に津軽民謡の草分け黒川桃太郎こと『嘉瀬の桃』の木像が安置されている。

嘉瀬の桃と黒川桃太郎は明治十九年に黒川太郎の二男として出生し



立山山の神社

く、村人は普段供物も出来ず、熟談の末、大正十三年七月、観音山の頂上に祠を移転したが、これも風雨のため数回となく飛散したので、松川林業（社長松川良治氏）や小栗崎の有志一同によって、昭和五十一年に観音山の入口近くの小高い平坦地に山ノ神の堂宇を新築、朱の鳥居三基を奉納し記っている。

山の神様の尊名は『木花開耶姫』と言い女神とされ、また『大山祇命』とも伝えられ、大山祇神は男神で、主に猟師・仙夫の山で生活する人達の主神とされてきた。

祭神としての山ノ神様は、山の守護神として信仰され、農村では、山の神は春になると、山から里におりてきて、田の神様となり、作物の稔りを護って、収穫が終わるとまた、山に帰って行くと信じられてきた。

山の神様は一般的に男神とするも、農民の間には、女神として祀る信仰があった。こどものころから唄ッコが好きで、在所の門口に立って物貰いに回って歩く坊様の歌う唄ッコに付いてゆくの常であったという。

桃は、成長とともに借子（年期奉公）に渡り歩いたが、唄ッコと三味線が好きで、病いコウモウ農家の休日を利用して神原の秋元仁太郎こと神原の仁太坊に弟子入り、ジョンガラ・よされ節と三味線も本格的に習い始めた。となつてからというものは、桃は大工仕事も、農家の仕事も手につかず、唄と三味線にぼつとうする毎日となつて、村人からは、『桃アお前大工より唄ッコダオン』と噂されていた当時の嘉瀬は大正末期の経済不況と打続く冷害で農家は、喰うに糧なく、働らくに職なく、ようよう露命をつなぐ有様で、嘉瀬の住民は北海道へ多くの人が離農、娘を身売りするような悲惨な社会であった。

立山観音堂

『物貰い』に在家の門口に立って物を乞う（津軽ではホイドと言った）姿を見ることが多くなつていった。

桃とても天来の美声と三味線を武器に津軽民謡の世界に入らざるを得なかったであろう。食うための糧として。

桃の唄の道場は嘉瀬観音山であったという。歌詞と『節回しの調子』ができあがると、観音山に立って、谷間を距てた中山山脈の峯々に向って、声高らかに唄いあげ、



忠魂碑



在村々の神社の例祭 宮で開かれる民謡競演会があると桃の出番となり、聴衆は『嘉瀬の桃ダ……桃う』と声援と拍手が送られる。

桃尊像

桃の唄は、声が良いだけでなく、節回しが誰よりも『ズバ抜けていて、桃のあとに唄う人が出ない程であったと言われ、桃の唄の絶長期であった。

『桃』は何処の唄会、宵宮に出演しても、必らず歌ったという唄の歌詞は

今の世の中 世は逆さまで

嘉瀬と金木の 間の川コ

石コ流れて 木の葉コ沈む

また『桃』は、調子变りの『世去れ節』を即興的、即席で唄いあげる名人でもあったと云う。

桃の芸は、名声があがるとともに、田舎唄会で終ることなく、民謡一座の花形看板となり、津軽各地は勿論のこと、秋田・南部、遠くは北海道カラフトまで巡業する旅芸人となっていたのである。

津軽民謡を舞台にのせ確立させた功績は偉大なものであったが、名声があがるとともに桃は、酒と女と賭博に溺れ、昭和六年青森市で看取る人としてなく、一人淋しく四十六才の生涯を閉じた。

小山内漫遊仙人が供養のため寄進した津軽民謡の草分け、黒川桃太郎の木像は、立山観音堂に安置されている。

会長に伊藤定吉氏が選任されている。

また昭和四年には在郷軍人会に新風をと、軍靴の足音も高くなってきた任政下のもとに、役員改選が行なわれ、会長に若手の山中熊四郎氏が帝国在郷軍人会嘉瀬村分会長に選ばれた。(山中熊四郎氏は大正四年十二月十日陸軍現役志願兵として近衛歩兵第二連隊に入営、大正六年伍長勤務上等兵として除隊)

会長山中熊四郎氏は、村当局と相計り、茫々と繁茂していたお城山の雑木林を、在郷軍人会会員や村人の手で刈払い、昭和四年松苗二万本、杉苗二千本。昭和六年松苗二千本、昭和七年松苗二万本。昭和八年松苗一万本。昭和九年松苗一万本。昭和十年松苗一万本の、六年間に松苗七万二千本をお城山に植えている。

いま三左エ門溜池竣工記念碑の前の歩道を上り、お城山に着くと、植林記念碑が立っている。高サ八尺、巾二尺、厚サ八寸の石碑に『帝国在郷軍人会嘉瀬分会、嘉瀬班植林地、山中礼一書』とあり、石碑の裏側には、苗を植えた年月と、嘉瀬分会長山中熊四郎と刻まれ、当時の在郷軍人会の活躍をとどめている。が、その後、何んらかの事由によって現在

お城山植林碑



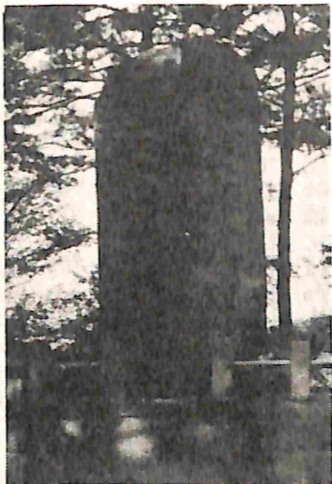
不明であるが、せつかく汗水流して植林した造林地の土地は他に買却された。また、当時の在郷軍人会は、観音山一带に桜の木を植え、今では嘉瀬地区の散策地・観光地となっている。忠魂碑には、日清事変の

三十三観音の参道を登り切ると、観音山の平坦地に出る。観音堂の裏手に二基の碑がある。

南側の一基の人名石碑は、日清・日露戦争で散った兵士の御霊の『忠魂碑』、建立寄付者名が刻まれている。北側の石碑は嘉瀬在郷軍人会が建立したものである。

いまから八二年前の日清戦争(明治二十七年Ⅲ一八九四)で、嘉瀬村々出身兵士祖国日本の御霊と散った二柱と、また日露戦争(明治三十七年Ⅲ一九〇四)で戦死を遂げた四柱あり、帰らぬ英霊の為に忠魂碑を建立する起運に乗り、敷地は時の有志、原田定吉氏が二〇〇坪を提供し、当時の米価一俵六十キロ当り五円二八銭のときに、伊藤定吉氏は『百円』という大金を拠出、嘉瀬在村の人達二〇七人の方々から『四百二十五円』の寄付が集り、陸軍大将一戸兵衛書の太字で『忠魂碑』と刻まれ、有志一同の努力によって明治三十七年(一九〇六)嘉瀬清久溜池南端沿いに建立された。

立山忠魂碑



当時の日本は富国強兵制策をとり、嘉瀬村でも在郷軍人会が明治四十年十一月(一九〇七)に創立された。大正九年在郷軍人会の役員改選が行なわれ、役員三一名、会員二〇八名により、

二掛、日露戦争の四柱、日華事変から大東亜戦争までの百五十四柱と、百六十柱(五所川原に合併された長富・毘沙門も含む)の氏名が刻まれている。

現在観音山にある忠魂碑は、昭和三十三年八月、嘉瀬溜池南端県道沿いから、風光明媚な観音山に移転したのである。

昭和十五年の東奥日報紙から

山中利一氏死去

東京都杉並区阿佐ヶ谷六丁目一八〇、山中利一氏(北郡嘉瀬村出身)は二年前より糖尿病を病み過般来阿佐ヶ谷駅前河北病院に入院加療に努めてきたが廿日午前四時十分死去した。享年四十四、同氏は早大出身で在学時代から相撲部の御大として鳴らし早稲田界隈『山中』の名は絶対的なものであった。卒業後渡米し社会問題を研究して帰朝したが、日米拳闘倶楽部を組織してその会長となり、綱野等の優秀選手を出した。又ラグビーも同氏が草分けで相撲、ラグビー、拳闘の大先輩である、右翼方面にも関係して多数の知己あり学生の養成にも当り何時も三、四人の学生を家に置いて世話して来た。二十一日午後一時から二時まで自宅告別式を行った。

山中氏告別式(東京支局発) 日米拳闘倶楽部会長山中利一氏の告別式は二十一日午後一時より杉並区阿佐ヶ谷の自宅で営まれた。これより先輝子未亡人、一粒種の達一君(九つ)その他親戚知人等が頭山満、早大ラグビー部、田辺帝拳会長、棟方志功氏等の花輪に囲まれた霊前で読経を営んだが名妓お鯉さんとして明治政界に鳴らして今は羅漢寺住職に納った安藤妙照尼の袈裟姿が一人目を引く、告別式には大川周明、岩田富美夫、北一輝未亡人、秋山定輔、石黒敬七、蛸崎早大人事課長、浦山修交会長、小笠原代議士、三浦杉並区県人会長、外崎青日社長、関谷貞範氏等の友人知己、早大相撲部、ラグビー部の部員等多数焼香した。尚遺骨は追って郷里で埋骨式を営む筈。

山中利一の群像

プロフィール

秋元 惣之進

明治三十年四月二十日北津軽郡嘉瀬村大字嘉瀬字雲雀野一七九番地の
一号、山中宇之長男として生れる。

昭和十五年二月十五日東京に於て死亡。時に四十四才。

青森師範中退、東京の中学をへて、早大政治経済学部入学。在学中相

撲部・ラグビー部のキャ

プテンとして活躍。早大

体育会長として鳴らし、

同期に兄弟同様の津島文

治・浅岡信夫氏らがいた。

大正十四年早大卒業と

同時にアメリカ南カリフ

オルニヤ大学に学び、帰

国後は「やまと新聞」記

者・総務部長・副社長を

つとめ、この間に右翼の

巨頭、頭山満翁の信頼を



得、北一輝、大川周明氏らと交遊。

昭和五年秋、日米スポーツの交流に貢献する願いをこめ、プロボクシングジム日米拳闘倶楽部を創立。

青森出身の熊谷二郎・網野松雄・山中利行(実弟)ら日本一流選手を

ようし、田辺宗英の主宰する帝拳

に対抗するまでの実績をあげ、日

本ボクシング界の初期をかざった。

昭和九年東奥日報一万五千部発

行記念として竹内俊吉事業部長と

ともに、本県初の国際プロボクシ

ング試合を青森・弘前で開催。

本県出身の熊谷・網野選手らが

比国(フィリピン)の強豪を相手

に白熱した好試合を展覧したこと

は、本県ボクシング史上のビック

イベントとして語りつがれた。

やまと新聞時代、日米拳闘倶楽部創立した当時、本県出

身者のめんどうをよくみ、スポーツ界だけでなく、芸術家・

政治家を育てたことはつとに知られ、その中に棟方志功・

三和精一氏らも居た。

観音堂内には日米拳闘倶楽部を創立し、会長として日本拳闘界に尽力
した山中利一氏の木像が、津軽民謡の草分け、黒川桃太郎の木像と仲良
く並んで祀られておる。

山中利一氏は明治三十年四月二十日(八七年前)一八九七)嘉瀬村大
字雲雀野一七九番の一号(現 金木町)山中宇之の長男として生れた。

山中家は嘉瀬村でも有数の資産家で、利一は恵まれた家庭環境に育ち、
幼少の頃から頭も良く機転が回り、体が大きな割には自由奔走に走り廻
り、村の人々が呆される程の餓鬼大将で無類の暴れん坊であり、父母を
時々困らせたが、父の宇之は表面では、利一を叱りながらも内心では、
利一は腕白ながらも強固な一本の筋があり必らずや「ひとかどの人物」
になるのではと見抜いておりました。

利一の生家は村の中央地点の十字の曲り角に位置し、すなわち角屋
敷だったから当時の人々は家号に「角」と呼び親しんで今でも「角の利
一」と言う村の古老達は勿論、若い人々でも知らない人が無い程です。

利一は成長と共に小学校に入学したが頭角をあらわし学級では外崎イ
セ(木立民五郎氏の母)と共に図抜けた成績であるが、利一は良く生徒
を泣かせ、又、先生を困らせたが先生は利一を特別に可愛がったと言う。

利一は小学校を卒業し金木明治校に入り同期の津島文治氏等と校友を
保ち仲が良かったが明治校に於ても、頭角を現し成績は図抜けた秀才で逆

に先生に教えたことが度々あった、と

言うが又、腕力も明治校、随一で他町

村クラスの人々は手も足も出ず「嘉瀬

の利一」と言うと、疎んでおったと言う

が反面、利一は少年の頃から人情に厚

く人々の面倒を良く見たと言う。「嘉瀬

の利一少年は晴れた日には、度々観音

山に小学同期の吉崎十造 須崎梅太郎

、原田男茶や友人太勢と一緒に遊びに

行き観音山から遠く権見崎や七里長浜、

西北地方の見渡し限りの田園光景を眺

め、又眼下に見える嘉瀬村を眺望出来

る観音山が大好きであったが、明治校

時代の拾五歳の少年利一は大好きな観

音山で自由奔走に遊び廻り此の頃から、

小さな胸に大きな志を秘め「自分の志は」すでに出来ており将来は必ら

ずや中央で活躍する夢をいだき勇躍したでしょう。

明治校を卒業した利一少年は青森師範へ入学したが中央へ出ると言う
意志があり、青森師範を中途で退学、上京し東京の中学を経て早大政治
経済学部へ入学、在学中は親から授かった体格を活かし相撲部、ラグビー
部のキャプテンとして活躍、また早大体育会会長として活躍し鳴らして
いた。大学の窓友には金木町出身の津島文治、浅岡信夫氏等と兄弟同様
に過ごした。

大正拾四年早稲田大学を卒業し昭和三年アメリカ南カリフォルニアの

書翰 ①

青森県北津軽郡嘉瀬村

木立いせ子様

人生の春は過ぎて、私等

も早や三十三の歳を迎えた。

小学校にゐた時を想い出

す。異郷にゐて、又もや一

年生になる。一体、人は何

時迄学ぶべきものか。

皆様へ宜しく

(大正九年)

一九二〇年二月九日

米国にて 利一